econ. 2002

北海学園大学経済学部報　エコン No.5

経済学部経済学科3年
宮腰　昌利君

経済学部経営学科3年
小野　紗知子さん

社会を知りたい！自分の力を試したい！

インターンシップ体験

《インターンシップって何？》

～それは社会と出会い、自分を再発見する場～

インターンシップとは、学生が企業や国・自治体等で実習・研修的な就業体験をする制度のことです。

つまり大学在学中、自分の専攻・将来のキャリアに関連したり、また広く実社会を経験するため、就業体験を通じて企業や職場の実態を知り、働く意味を考え、自分にあった仕事を探求する機会をつくることを目的としています。大学生にとっては、社会との出会いを通じ、自分のしたいことを発見する場ともなっています。2001年度の北海道の実施大学別参加学生数は以下のとおりです。

経済学部では、1999年・8名、2000年・5名、2001年・24名の学生が、夏休みを中心に約2週間、企業や国・自治体などに派遣されました。

派遣学生受け入れで実際に御協力頂いた企業

北海道通産局・北海道経済産業局・北海道庁・札幌市役所・北海道地域振興財団・北海道文化放送（UHB）・北洋銀行・西武百貨店・東急百貨店・マイカル北海道・セイコーマート・リクルート北海道じゃらん・札幌国際観光、札幌三信倉庫…他

このほか多くの企業にも受け入れ準備をして頂きました。

2001年度北海道内インターンシップ実施大学別参加学生数

大学名（国立）	参加学生数（人）
北海道大学	23
北海道教育大学函館校	8
〃　札幌校	6
〃　釧路校	5

大学名（私立）	参加学生数（人）
北海学園大学	66
札幌学院大学	14
北海道東海大学	12
札幌国際大学	6
北海道工業大学	1

初めて踏み込んだ「社会」アルバイトとは違うインターンシップの厳しさに戸惑い

司会／インターンシップに参加された平井さんと小野さんの両名に出席してもらいました。これから、お二人にインターンシップの体験談を語ってもらおうと思います。最初に平井さんから。
平井／はい。
司会／平井さんは北海道庁で研修されたそうですね。いろいろな体験をされたみたいですけれども、どのような内容だったか、簡単に説明してもらえますか？
平井／私は、北海道庁の保健福祉部に配属されました。北海道庁といっても、本庁の中だけじゃなくて、心身障害者総合相談所や中央児童相談所にも行きました。研修中は、ずっと本庁に通うのだと思っていたのですけれど、結局２週間の研修のうち、２日間しか本庁に行きませんでした。

司会／相談所での研修とは、どのようなことをしたのですか？
平井／実習生のような形でした。「仕事をした」という感じではなくて、他大学の福祉学部に在学している実習生の方と一緒に勉強したというか…。補装具点検のために美唄に行くこともあって、義足など、実際に補装具に触れたりしました。
司会／この研修には何名参加されていましたか？
平井／総合相談所では、他大学の学生も含めて３名で研修を受けました。
司会／小野さんは、『リクルート北海道じゃらん』で研修されたそうですね。
小野／はい。私の配属先は市場開発課というところで、営業の研修を体験させていただきました。営業という職種だと、皆さんが通常のお仕事している中で、私のような学生がチョロチョロとやらせてもらえるわけがないな、と思っていました。実際には「一人で営業、外勤務に行っておいで」と言われて。最初の２日間ぐらいは研修をして、以降は外での営業を体験しました。お店に『じゃらん』のチラシを配って、広告の契約をいただく新規開拓ですね。

司会／どんなお店へ行ったのですか？
小野／配属が市内の開発課だったので、札幌市内の飲食店です。
司会／営業ついでに食事してきたりとか…。
小野／それはなかったですね（笑）。１日20件弱くらい訪問しました。でも、残念ながら契約は、最後まで取れなかったんです。

小野　紗知子さんのインターンシップ・プログラム

［㈱リクルート北海道じゃらんで体験］

●1日目
じゃらん媒体概要、商品知識
ビジネスマナーについての説明

●2日目
営業研修

●3日目
営業のロールプレイング、営業同行

●4～7日目
営業実習

●8日目
須田製版（『じゃらん』印刷会社）見学

●9～10日目
営業実習

受入企業からのコメント

㈱リクルート北海道じゃらん●市場開発課／笠井美香さん

▼▼小野さんには、全国版ガイドブックのアシスタントとして、営業リストづくりの業務を担当してもらいました。『足で稼ぐ』という営業の原点の体験です。即戦力として現場を直接経験し、彼女のガンバリは若い社員の刺激にもなっていました。その日にあった疑問点を出し課題を解決するという姿勢があったので、さらに2～3週間続ければ、もっと仕事として活きたんじゃないでしょうか。インターンシップは、やる気とパワーを出し、目的をもってどんどん飛び込んでいくことが大事だと思います。

平井　梓さんのインターンシップ・プログラム

［北海道保険福祉部（心身障害者総合相談所など）で体験］

●1日目（本庁）
保健福祉行政の概要と課題、政策評価について（1）

●2日目（　〃　）
保健福祉行政の概要と課題、政策評価について（2）
障害者保健福祉行政について

●3日目（心身障害者総合相談所）
心身障害者総合相談所の業務概要について
身体障害者の相談判定業務について

●4日目（　〃　）
知的障害者、補装具の相談判定業務について

●5日目（　〃　）
相談判定会議、施設見学

●6日目（　〃　）
障害者の心理学的判定について

●7日目（　〃　）
美唄市補装具　巡回相談

●8日目（中央児童相談所）
中央児童相談所の業務概要について
施設見学、一時保護所実務研修（1）

●9日目（　〃　）
一時保護所実務研修（2）、児童虐待・不登校について

●10日目（　〃　）
一時保護所実務研修（3）、非行・障害について

受入企業からのコメント

北海道心身障害者総合相談所●相談判定室長／片山好彦さん

▼▼相談所では、毎年福祉の実習生を受け入れてますが、平井さんは10日間と期間が短く、もの足りなかったかもしれません。講義中心だったので、車椅子や義足などの相談に来る障害者にもっと直接接する機会があればよかったかもしれません。仕事は専門的で中味を理解するのは大変ですが、障害者の悩みや希望していることを少しでも理解し、どんな事ができるのかを施設に実際に来て、あいさつなどをしながら構えず理解してもらえただけでもよかったかな、と思ってます。

地域や社会に貢献する人材育成を担う インターンシップ研修で、社会的マナーや　心構えを培おう

司会／実際に仕事をしてみて、どう感じましたか？
平井／北海道の行政の中で、社会福祉部がどのような役割や業務を果たしているかを学んだこともちろんですけれど、やはり実際に相談所に行って、障害者や保護されている子どもたちと接することができたことが、とても良い経験になったと思います。
司会／一番印象に残ったのことは？
平井／自身が障害を持ちながらも、相談所で働いている方にお会いしたんですよ。私たちと同じように働いていて、その人から補装具などについて習ったんです。それによって障害者に対する考え方が変わり、学ぶものがありました。深い意味で「私の先生」となりました。
司会／研修を通じて新しい境地に達した、という感じですね。
平井／はい。
司会／働くことについての理想と現実があるでしょうけれど、実際インターンシップへ参加する前と後で「働く」ということに対する認識は変わりましたか？
平井／結構、変わりました。
司会／具体的には？
平井／私は、今、公務員志望なのですが、公務員を志望する理由に〝安定しているから〟〝ちゃんと定時に帰れるから〟という学生が多いと思うのです。でも、実際は公務員も毎日定時に帰れるわけではないですし、狂牛病のような問題が起きたなら、朝から夜まで対応しなくちゃいけないですよね。そういう面では、民間も公務員も同じだな、と思いました。
司会／現実の厳しさ、というところですね？
平井／はい、そうですね。
司会／仕事に対してやりがいや面白さ、新たな発見はありましたか？
平井／そうですね。補装具を点検することの他に「補装具を使っても良いですよ」という判断を下すのも相談所職員の仕事なのですけれど、それは、補装具を必要とする方の〝人生の一部〟を決めるわけじゃないですか。慎重にやらなくてはいけない。そこにやりがい、責任を感じます。もともと福祉関係に興味があって、福祉部にインターンシップ希望を出したのですけれど、実際に行ってみて、やはり、道庁、さらに市役所とか区役所などとなると、より道民と密接な関係になるわけです。実際の現場を見て、世の中のことが少し見えてきました。
小野／「公務員は社会のためになっている仕事をしているんだ」という意識を持ちますよね。でも、民間企業の状況を見ても、会社のためというのと共に、世の中のためという感じですね。それも一つの発見でした。今回の研修を担当してくれた『じゃらん』の笠井さんは、とても仕事のできる女性で、影響を受けました。インターンシップに行く前の私は仕事、就職に対して「お金をもらって、とりあえず自分の生計を立てて暮らしていければ良いかな」という考え方でした。けれど、研修に行って笠井さんや女性の皆さんが仕事に対する強い意欲を持たれているのをみて、やはり働くのなら前向きに意欲を持っていたいな、と感じました。

研修先の事前情報収集は必須 さらなる疑問は積極的に質問し、働くことへの強い熱意をアピールしよう

司会／大学在学中にインターンシップを経験することは、学ぶ上で社会を体験することです。この体験を通じて、大学での勉強の仕方をもっとこうしたほうが良いなとか、こういうふうなことを追求してみようかとか、何か目的が見えましたか？
平井／こういう場所で働きたいという気持ちが強まりましたので、勉強にも力が入りますね。辛くなった時には、インターンシップ期間中につけていた日記などを読むようにしてます。
司会／なるほどね。うちの学部でも、インターンシップで通産局へ行って、そこへ就職したくなった学生がいてね。一浪したけれども念願がかなったんですよ。強い気持ちは大切ですね。
平井／そうですね。
司会／小野さんはどうでしたか、営業の厳しさを経て…。

司会の伊藤友章先生

小野／私は民間希望で就職活動をしているのですけれど、今、大学卒となると、女性でも事務職というのは受け入れてもらえないみたいで。だからといって、今回の研修で実際に営業の厳しさを体験した上では、簡単に〝営業希望〟に…と言えなくなはなりました。さまざまな営業職があるかと思いますし、もっと色々なことをしてみたいという気持ちもあります。仕事について、以前より悩むようになりました。
司会／ところで、インターンシップを経験した先輩として、これから研修に参加する後輩に対して「こういうことを心がけると、もっと研修を有効に使えるよ」というようなアドバイスはありますか？
平井／私の場合、福祉についてあまり知識を持たないで参加したことが、ちょっと辛かったです。その代わり、自分から「こういうことを知りたい」と、どんどん質問をしたんです。自分から積極的

に行動すべきじゃないかな、と思います。インターンシップというもの自体も、社会的にまだ良く知られていないのですから、自分から飛び込んでいくべきですね。職員の方から逆に「インターンシップって、結局、何するの？」と、聞かれたりもしました。

司会／小野さんはどうですか？

小野／私も研修先について下調べをしておくと良いと思います。それから営業職ですと、実際にお客様とお話をしますから、言葉づかいに気をつけたり。隠そう隠そうと思っても、つい、普段の言葉づかいが出てしまうものですね。無理をすると、余計に言葉が詰まったり、しどろもどろになってしまう。敬語の使い方は、勉強をしておいたほうが良いと思いますね。あと積極的に話すように。私は普段言葉少ない方なので、その点は気をつけました。

司会／営業は、会話ができないと仕事にならないですものね。インターンシップは大学３年生の夏休みという、大学の勉強も一生懸命できる時期に、大学を離れて実体験をもって実際の企業や国や自治体などを知るわけですから、大学に戻って何か勉強に対する取り組み方も変わってくれると良いと思います。お二人のゼミナールでの専攻（製品開発論 石田 修一ゼミ）からすると、経営戦略論とか組織論などがメインになっているかと思いますけれど、少し違った意味で大学の勉強を活かす取り組みをして欲しいですね。

小野／そういえば、お客様とのお話の中で、ポロッと経営上の単語が出てくることがありました。経常利益がどうのこうのと。ちゃんと理解していなかったので、焦りました。そういう簿記関係や会計分野のことを、もっと勉強しておけば良かったなと後悔しました。

平井／私は、経済の勉強とは無縁のところで研修をしたので…。

勉強というのではないですが、福祉関係の仕事では遅刻は許されないんです。まあ、どんな仕事でも当たり前なのですけれども。でも、私はそういうことに〝ゆるい〟タイプだったので…。この研修を受けてからは、時間に対しての意識が変わったと思います。

司会／それは収穫ですね。

平井／あと、営業の仕方や話し方、仕事の組み立て方などを知りたくなりました。

司会／では最後に、インターンシップをひとことで言うなら？

小野／辛かったけれども、本当にいい経験をした、ということです。研修の最終日には、泣いちゃいましたし（笑）。

司会／本当！？

小野／はい、でも本当に研修を受けて良かったと思います。みんな、もっと積極的に参加すべきだな、と感じます。

司会／平井さんは、どうですか？

平井／市職員や公務員などを志望する学生には、勉強だけではなく、実際にそこでどのようなことを行っているかなどを知ってほしい。知るには、やはり、その現場の人たちに聞くこと、自分で体験することが一番だと思うので、インターンシップをお薦めします。私も研修によって、さらに福祉の仕事への興味がわいてきました。本当に良い経験になりました。

司会／インターンシップに行って「現場を知れ」と。

平井／そうですね。

司会／僕は以前、北海道庁に就職が決まった学生に「212市町村すべて言えるかな？」と言ったことがあります。北海道は広いんですよ。その分役割も広く、多くの人々から求められてる。これからも勉強や就職活動に励んでください。

小野・平井／ありがとうございました。

（この対談は2月22日、学内で行われました。）

㈱北洋銀行で体験

金森　正樹君のインターンシップ

●研修内容

- オリエンテーション
- 金融とは
  金融機関の役割と業務
- 社会人としての言葉遣い・マナー
- 審査業務
  融資の基礎、稟議制度、案件審査
- 営業店見学（大通支店）
- 外為業務
  外為与信、外貨販売等
- 個人向融資
  個人ローン他
- 教育ゲーム
- EBの現状
- 学生に求められるもの
- 当行の商品概要
  広告宣伝等
- 礼勘、実習の感想・アンケート

■自分の中での目標や意義

学校で習うことと仕事でることにはギャップがあり、そのギャップとは何かを知りたかった。また、就職するという意味をこの機会を通じて考えたいと思い、研修に参加しました。

■事前用意

銀行とはどういうものかを自分なりに整理したり、北洋銀行はどのようなところかを調べました。

■研修の内容や感想

研修の内容についていくことができるか、研修を共にする仲間と協力してやっていくことができるかという不安はありました。研修が始まると、そのような不安も消え、逆に楽しく、不安に思うということは特にありませんでした。

研修は講義形式で、実際に現場で働くことはありませんでしたが、その講義の中で、普段表側からしかわからなかった「銀行が基本的にどのような仕事をしているか」を内側から知ることができ、大変勉強になりました。今回のインターンシップの研修は、企業側が私達のことをよく考えてくれている内容で、どれも非常に満足できるものでした。銀行の業務は、自分が思っていたより多岐にわたっていることを知り、特に実際に働かれている方々の生の声を聴くことができて、今後の参考になりました。

■研修を終えて

北洋銀行が、これからも「北海道の銀行」として活躍していくことを実感しました。また、これから自己責任がますます強まる時代に対して、お客一人ひとりにきちんとこたえることができる、万全の環境であることも確認できました。

●後輩のみんなへ

将来やってみたい職業があるのなら、インターンシップは、その職業が実際に自分に合うかどうかを確認するチャンスなので、ぜひチャレンジして将来への糧にしてほしい。将来何をしたいか決めてない人も参加することで、その業界を知る機会ができ、就職への第一ステップとなります（実際にそういう人もいました）。就職への助けになることも確かですが、インターンシップで一緒になった仲間も貴重な存在となります。インターンシップは自分にとって就職する意味を考える機会として大学生活の一つの貴重な体験となるので、是非頑張ってください。

(財)北海道地域総合振興機構で体験

海老子川　雄介君のインターンシップ

●研修内容

- 財団の概要の説明、産業部の業務概要
  研修概要の説明
- 千歳にて南後志地域振興計画策定調査
  検討委員会の打ち合わせに同行
- 日自振ヒアリング同席、資料等作成
- 北海道経済産業局打ち合せ同行
- 産業活性化委員会資料作成
  道経連打ち合せ同行
- 産業活性化委員会出席、懇親会
- 調査検討委員会資料作成
  ホームページ作成
- 事後報告書の作成
- 千歳にて調査検討委員会出席
  事後報告書作成

■自分の中での目標や意義

インターンシップという制度自体学生の前向きな姿勢を前提とし、その自主性・積極性が問われていると考えています。そのため、しっかりとした目的を持って参加しなければ十分な効果が得られないので、事前にしっかり掘り下げておくことが大切だと思います。

■事前用意

インターネットで財団のホームページを見て組織・業務内容を調べ、直接現地まで行きました。事前に調べ、準備を行ったので、研修への不安は特にありませんでした。

■研修の内容や感想

社会人として、その道のプロとして働くということに対し、夢や希望や志を抱いていますが、この研修でその厳しさを感じさせられました。研修では会議やプレゼンテーションのようなものに出席させていただきました。会議は形式的なものではなく、質の高い質問が飛びかっていたのが印象的でした。僕の場合、比較的早い時期に研修を受けたので、就職活動の準備としてインターンシップをとらえられ、よかったです。

●後輩のみんなへ

企業と学生の直接的な交流が就職活動以前にあった方が、より高い効果をあげられると思います。また、ほとんどの学生は、しっかりとした面接を受けることはないと思うので、練習にもなります。

㈱富士通北海道システムエンジニアリングで体験

桜井　麻梨子さんのインターンシップ

●研修内容

- 社内見学
- OBとの懇談会
- プリンターの設定
- Word、Excelの学習
- ファイリング作業
- Power Pointを使ってプレゼンテーションへ向けての資料作成
- 資料を使って研修内容発表
  （プレゼン形式）
- 事後報告書作成

…など

■自分の中での目標や意義

就職活動以前から実際に企業で働いて、企業の内側を知りたかったので、このインターンシップに参加しました。

■事前用意

参加が決まってからは、研修に向けてExcelやAccessなどパソコンに慣れるため練習をしました。

■研修の内容や感想

もともとパソコンが苦手だったので、SEという職種の企業に研修に行くのは非常に不安でした。毎日、パソコンを使っての作業だったので、その作業そのものに緊張しました。研修を担当してくれた岡島さんが、一つひとつの作業をする時に、その作業の目的・意味などを丁寧に説明してくださったので、理由がわからないまま作業をするということがなく、とても良かったです。それから、研修に参加する前までは、残業というものは滅多にないものだと思っていましたが、実際、企業に行くと終業時間になっても帰る人はほとんどいなく、皆さん一生懸命働いていることを知りました。

■研修を終えて

〝お客様のニーズに応えたソフトを開発する〟ことを目標とする会社として、この先もIT不況につぶされないだけの力を持っている会社である、と思いました。

●後輩のみんなへ

研修に行く直前に、ではなく、日頃から目上の人と話をする時には、正しい敬語を使うように心がけるべきです。直前だけ使おうと努力していても、研修期間中は日々緊張するので、いざという時に正しい敬語が出てこなくなってしまうものです。それから、研修に行く前に、その企業についてできるだけ調べておくと、OB懇談会の時などに色々な質問ができるし、また、話もよくわかるのでいいと思います。

テーマ解題

時代転換と地方地域の再生

奥田　仁　北海学園大学経済学部教授

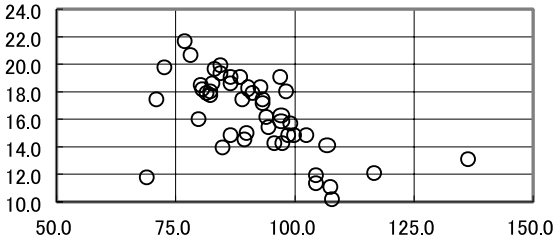
研究テーマ　EU周辺諸地域と北海道の比較研究

主要著作　『農業雇用と地域労働市場』北海道大学図書刊行会（岩崎徹編著・1997年）
『地域経済発展と労働市場』日本経済評論社（奥田仁著・2000年）、他論文多数

Economistの2月28日号は、現在の日本の不況を1930年代の米国の大恐慌と比較し、これよりも悪質であるとする議論を紹介している。中でも北海道の地域経済が深刻な状況にあることは知ってのとおりである。こうした北海道経済の脆弱性は、よく域際収支の赤字構造として指摘され、その背景にある製造業の立遅れ、公共投資依存型の構造が問題にされる。こうした北海道の経済構造は、戦前に形成された「二極構造」、高度成長での立遅れなど、歴史的経過の中で形成されてきたものであるが、これらの議論はここではひとまずおくこととしよう。

いま長引く不況とともに、より長期的な問題として重大視されているのは高齢化の進展であろう。高齢化は先進資本主義国共通の問題であるが、日本が特に急激に進展しつつあることもよく知られている。ところがこの高齢化には、実は地域問題としての側面も強く存在しているのである。次の図1を見て欲しい。縦軸は人口に占める65歳以上人口の比率、横軸は全国平均を100とした一人あたり所得で、ここにプロットしているのは都道府県のデータであるが、日本において所得と高齢化比率の間に極めて強い逆相関が存在することに気がつくであろう。紙数の関係でここに示すことはできない ↘

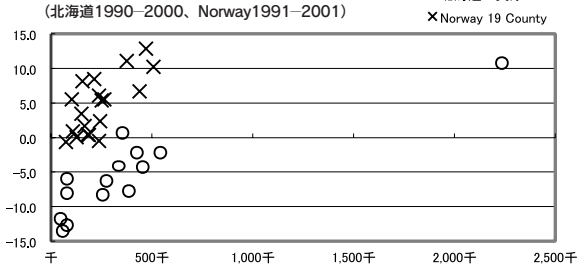
図1：地域間所得格差と高齢化比率（日本）



↘ が、ヨーロッパの地域について同様のグラフを作っても、フランスがやや似た傾向を示すものの、このような明白な逆相関は認められない。この図が意味しているものは、日本において、一部の大都市地域とそれ以外の地方地域との間に大きな所得格差があるだけではなく、若年人口が流出したことにより、地方地域でより急速な高齢化が進んでいるということである。

過疎化は、他の先進国と比べても日本社会の特に大きな問題であるが、これは北海道により集中的に現れている。昨年私が6ヶ月間滞在したノルウェーは人口450万人で北海道の568万より少し少ないが、この19のFilke（County）と北海道の14支庁について、人口規模と10年間の人口増減率を示したものが図2である。札幌を含む石狩支庁がグラフの右端の突出した位置にあることが目に付くであろう。しかしより重要なのは、北海道の他の13支庁が、十勝をわずかな例外として、大幅に人口を減少させているということである。ノルウェーでは、北極圏に位置するFinmarkとNordlandがごく僅かに減らしているが、ほとんどすべてのFilkeがなべて人口を増加させている。ここには福祉社会における高い出生率などの背景があり、またOslo周辺とそれ以外の地域との格差という問題もあるが、北海道における札幌一極集中と地方地域の過疎化が決して地理的要因で片づけることができないことを示しているといってよいであろう。

図2：北海道とノルウェーの地域別人口規模と人口変化
（北海道1990−2000、Norway1991−2001）



ノルウェーでも、より小さなKommune(Municiparity)のレベルでは過疎化が大きな問題であり、これにどう対処するかが重要な政策課題となっている。とはいえ、次の表1を見て欲しい。北海道の212市町村のうち人口が増加しているのは僅か31にすぎず、大部分の市町村が人口を減少させている中で、127市町村、つまり北海道の自治体の過半数が10年間で10%以上の急激な人口減少を経験している。ところがノルウェーでは人口減少自治体は224で約半分、うち107は−5%未満、10%以上の減少は48自治体で、全体の1割ほどに過ぎない。北海道より少ない人口で435の Kommuneという、小規模な自治体が多い（とはいえこのKommuneが福祉社会の根幹を支えている）なかでのこの差はきわだったものであるといわなければならない。↘

表1：ノルウェーと北海道の市町村自治体の人口変化

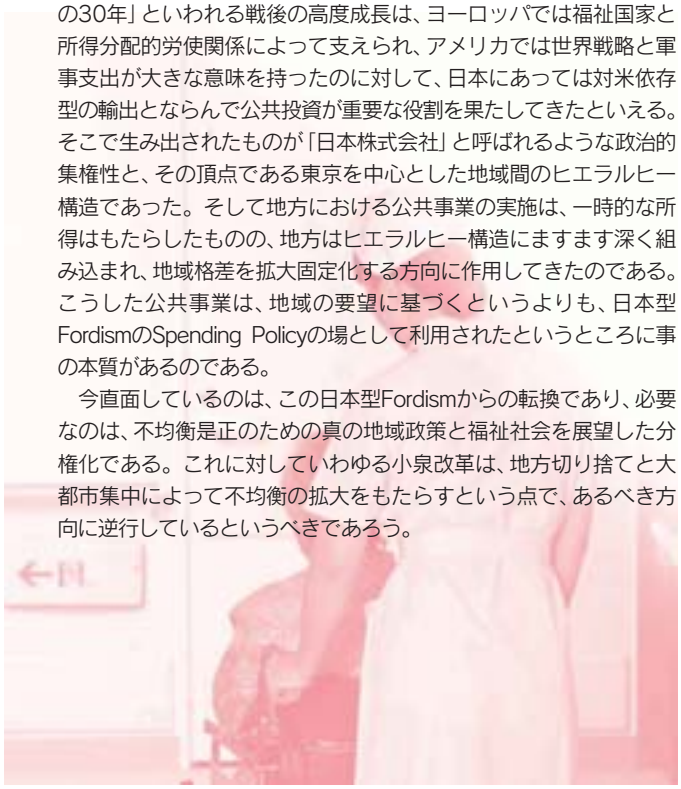
	-20%以下	-10～20%	-5～10%	-0～5	+0～5%	+5～10%	+10%以上	合計
北海道市町村	23	104	40	14	12	5	14	212
Norway Kommune	2	46	69	107	89	70	52	435

↘再度問題をまとめてみよう。日本は東京一極集中と地方地域の過疎化と高齢化が進んでおり、北海道ではその縮図としての札幌集中と地方の過疎化がもっとも激烈に見られる。

ここで逆説的なのは、地方地域に膨大な公共事業が行われている日本において過疎化が激しく進んでいるということであろう。GDPに占める建設業の割合はアメリカが4.1%、イギリス4.7、ドイツ4.5、フランス4.5、ノルウェー3.4に対して、日本は10.3%（94～96年）となっている。「土建国家」と呼ばれるゆえんである。公共事業は、これまで地方地域に大きな所得をもたらしてきたと言われている。しかし結果を見れば、日本の地域間所得格差は縮まっておらず、過疎化が進んでいるのである。

これは、「日本型Fordism」の問題点として理解されよう。レギュラシオン派が用い、その後欧州の地域経済学の多くの理論家が用いるようになったFordism概念の紹介はここでは省略する。ただ、「黄金の30年」といわれる戦後の高度成長は、ヨーロッパでは福祉国家と所得分配的労使関係によって支えられ、アメリカでは世界戦略と軍事支出が大きな意味を持ったのに対して、日本にあっては対米依存型の輸出とならんで公共投資が重要な役割を果たしてきたといえる。そこで生み出されたものが「日本株式会社」と呼ばれるような政治的集権性と、その頂点である東京を中心とした地域間のヒエラルヒー構造であった。そして地方における公共事業の実施は、一時的な所得はもたらしたものの、地方はヒエラルヒー構造にますます深く組み込まれ、地域格差を拡大固定化する方向に作用してきたのである。こうした公共事業は、地域の要望に基づくというよりも、日本型FordismのSpending Policyの場として利用されたというところに事の本質があるのである。

今直面しているのは、この日本型Fordismからの転換であり、必要なのは、不均衡是正のための真の地域政策と福祉社会を展望した分権化である。これに対していわゆる小泉改革は、地方切り捨てと大都市集中によって不均衡の拡大をもたらすという点で、あるべき方向に逆行しているというべきであろう。



講義紹介

協同組合論（2部）

山田　定市

（テーマ）
現代社会における協同組合・非営利組織（NPO）の位置・構造・役割

協同組合は、農協、生協、漁協、中小企業協同組合をはじめとして、森林組合、信用組合など多岐にわたり、最近は、労働者協同組合など、その領域がさらに拡大している。

本講義では、資本主義の“落とし子”ともいえる協同組合・非営利組織の生成・発展について理論・歴史を踏まえて、現代社会における位置・構造・役割に関して、過大ないし過小評価に陥ることなく、正確に解明するとともに、今後の展開方法・条件について明らかにすることを目的としている。

協同組合を題材にしながら、現代日本の経済社会構造は一番基本的に何が問題なのかその奥にあるものを理解してもらうこと

司　会：一年間の講義を通じて、一番伝えたかったものは何ですか？

山　田：協同組合というのはそれ自体、非常に具体的存在なわけですけど、関心の無い人にとっては、それはそれで済ますことが出来るわけです。むしろ協同組合を題材にしながら、現代日本の経済社会構造は一番基本的に何が問題なのかということ、その奥にあるものを理解してもらうことに力を入れてきました。そういうことで、農業問題とか環境問題、あるいは食糧問題とかを中心的にやってきたわけなんです。それと、講義名は協同組合論となっていますが非営利組織―NPOの問題にも広げてやってきたわけです。理論的なバックに従って具体的な話を展開しましたので、たぶん易しくはなかったと思いますね。

もちろん協同組合について具体的に触れてきましたけど、生協とか農協とかの協同組合組織に関する具体的な知識よりも、基礎的なところについての理解がある程度あれば、まあ、卒業してからでも何かの問題にぶつかった時に応用を利かせられればいいと思って、判断する力を重視してやってきたつもりです。具体的問題は、その時に自分が関心を持てば良いわけで、バックグランドとか観点がしっかりしてれば自分で理解できることです。

学生A：いろいろ欲張って話されたので、易しくはなかったですね（笑）。私は、ちょうど生協で働いてるんですけど、身近すぎて気づかなかったところやバックにある理論的根拠を初めて知りました。

学生B：生協で働いている人の話を聞くと、かなり労働条件が厳しいらしく、協同組合としての理念と実際がかなり違うと聞いたことがあります。

山　田：それはもう偽らざるところです。Co-opさっぽろは北海道で一番大きな生協ですが、大赤字を出してその再建途上にあるということを理由に、ずいぶん職員や組合員にきついことを強いている面があることは事実だと思いますね。ただ、食品添加物の問題や食の安全性については、生協が先鞭を付けてそれが民間にも広まった事実があります。再建問題に止まらないで生協はまた次のステップを考え、社会的な存在理由とか、社会的に意義のある存在にどう変わっていくかが大きな課題なんだろうと思うんです。

司　会：協同組合とかCo-opが破綻したり、統廃合している現実をどう考えたら良いんですか？

山　田：農協や生協といった協同組合が、それ自身で世の中を変えていくといったようなあまり過大な期待を持たないで、やれるところからやれる範囲で、着実に社会で問題となっていることを取り上げて進めていくことが大切でしょうね。経営上の失敗をもたらした原因の一方に、あまり大きなことを考え過ぎちゃったということがありますし、市場を乗り切るだけの力量がないまま理念だけで進めていった結果、破綻するといったことになったんじゃないかな。今、多くの生協がその反省の上に立って重視しているのが、人間にとって一番日常的な「食べ物」ですね。毎日毎日のことを大事にして、そこが成功すれば他の方も次第に良くなっていくということに気付くのに、だいぶん時間がかかったように思います。今日のように困難な時代になればなるほど、生協がやるべき課題はますます沢山あると思いますから、それをやりこなすだけの組織上、経営上の力量を身に付けるしかないでしょうね。

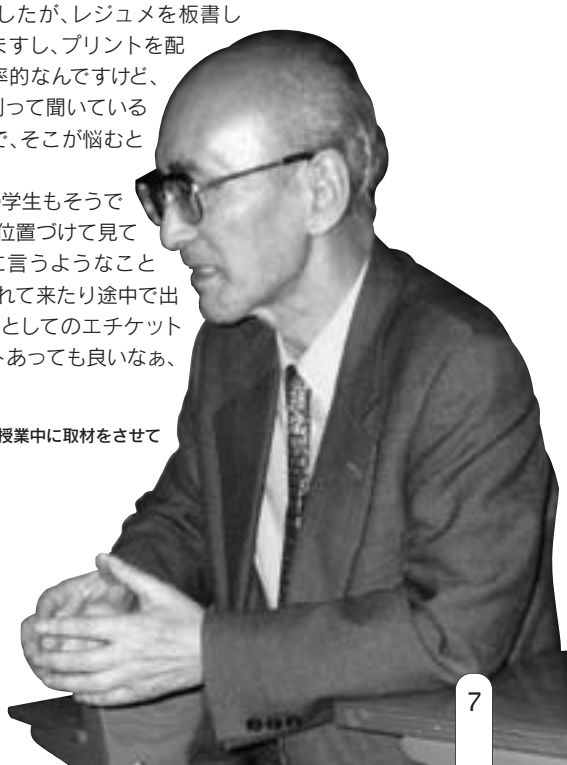
毎回、出欠を兼ねて学生から意見や質問を貰ってますそれに応えていくことは意味のあることかなぁ、と思いますね

学生C：講義の中で、前の週やその前の週に話されたことに戻ったりして、多少混乱したことがありますけど、毎回プリントを配布して貰えるから講義の趣旨や内容を目で追うことができてとても助かりました。

山　田：毎回、出欠を兼ねて学生から意見や質問を貰ってますから、質問に答える形で前の週の話をしたり、その週との兼ね合いを考えてます。意見を書いてくる学生はあまり多くないんですが、大なり小なり皆が感じてることでしょうから、それに応えていくことは意味のあることかなぁ、と思いますね。もっと板書を増やして欲しいという意見が時々ありましたが、レジュメを板書したのでは繰り返しになりますし、プリントを配るのは教育効果の面で効率的なんですけど、必ずしもレジュメを全部判って聞いているわけでもない面もあるので、そこが悩むところですね（笑）。

ただ、1部の学生も2部の学生もそうですが、学生を一人の大人と位置づけて見てますから、いちいち子供に言うようなことはしませんけど、かなり遅れて来たり途中で出て行く学生がいて、聞く側としてのエチケットというものが、もうチョットあっても良いなぁ、と思いますね。

（12月21日、協同組合論（2部）の授業中に取材をさせて頂きました。）



ロシア語文化演習（1部）

寺田　吉孝

（テーマ）ロシア語文献を利用する

ロシア語文献の読解訓練。ロシア語資料の利用方法の体得。外書講読と演習をあわせたような授業にしたい。ロシア語文を独力で何とか読解してやろうという気構えを養う。

ふつうのロシア人と出会ってみたら いままでその国の一面しか見てなかったことに 気付きました。

寺　田：ロシア語ってむずかしい言葉と思われているけれど、そうでもないと思います。でも、複雑な言語なんです。初級段階、1年生・2年生の時はむずかしいけれど、それを乗り越え、こうやって3年生まで続けて、中級段階になると楽になる、簡単になるんです。続けて受講してくれたことに感謝してます。私のロシア語講義を受けてみてどうでしたか。

学生D：1年生の時は文法などむずかしかったけれど、3年生になってロシア短期留学もあったので、“取り組みたい”という気持ちになったし、授業でいろいろな文献を読むことで解るようになってきました。

寺　田：私の授業は、独力でロシア語の文献を読めるようにすることを目的としています。それに、ロシアについても深く知ってもらいたいので、ロシアの歴史・地理や文学など、いろんなジャンルに手を伸ばしています。授業は学生が発表し、これに私がコメントをつけたりしながら進めています。最後にはチェーホフを読もうとたくらんでいますが（笑）。

学生E：ロシア語を学ぶ前、またロシアへ行く前は、ニュースなどで伝えられるような密輸とかロシアの悪い面しか見てなくて、固定観念しかなかった。けれど、ふつうのロシア人と出会ってみたら、いままでその国の一面しか見てなかったことに気付きました。いろいろなことを見ることで、ロシア人に対する考え方がすごく変わった。友達もでき、よかったです。

寺　田：素朴なロシアの心に触れた、という感じかな。留学先はウラジーミルというモスクワから200キロぐらいのところで、7～800年前に一度都になった、日本で言うなら奈良みたいな街です。5週間ロシアに滞在して、帰りにロンドン・パリ・ローマなども回ってくる。ロシアを他の国とも比べられる留学だと思います。（背景写真はロシア留学時のもの）

学生F：ロシアに留学したことでロシアに対する姿勢が変わった。今までだったら何げなくやって、テストさえ良ければ、という感じだったけど、今は、とにかく学ぶことが面白い。先生と話すことも興味を持ってる話題が多いので、本当にこの授業は一番面白いし、ためになっている。他の先生には悪いけど……（笑）。

寺　田：ロシアだけでなく、ウクライナねたも多かったけどね。

学生F：ウクライナ人の友達もできました。

寺　田：ロシア留学から帰ってきて、みんな積極的になったし、いろいろなところに顔を出すようになったね。そして、外国人の友達も増えた。

学生F：実際にロシアに行って、ロシア人と生活したので、今ロシア人と会っても“ものおじ”しない。自分から積極的にロシア人がいる場所に出かけたり、国際プラザに毎週通うようになりました。あと、サハリン交流フェスティバルにも出てきました。

寺　田：ロシア人とウクライナ人の彼女もできたよね。国際恋愛だよね（笑）。ところで、そのロシアの魅力とは、なんだろう。

学生D：言葉では言えないけど、魅力がある。

学生E：日本みたいにせこせこしてない、というか。「ナルマーリナ」、すべてが「ま、いいか」という感じ。

寺　田：「ナルマーリナ」は関西弁で言うところの“ぼちぼちでんな”という意味に近い。これは本学・ロシア研究会の機関紙の名前でもあります。初めての相手の人には警戒心が強いけど、一度親しくなるととことん付き合えるのがロシア人のいいところかな。

ロシアに行ってみて 「ここまで来たら極めよう」と！ 弁論大会にも優勝したので気持ちがこもっています。

学生D：ロシアを学ぶことで逆に日本が見えてきて、日本のいい面・悪い面が見えた。またロシアの方も、いい面・悪い面が考えられるようになってきました。

学生E：買い物なんか特にそうですけど、日本人は店に入ると店員から「いらっしゃいませ」、出るときは「ありがとう」と言われますけど、ロシアでは店員におつりを投げられる（笑）。向こうとしては「売ってあげてる」ということなんでしょう。

寺　田：小樽のロシア人の入浴マナーなんか話題になってます。ここには日露間の違いが見られます。ロシアでは、風呂屋というのは日本のバーみたいなもんで、社交の場なんです。酒飲むのはあたりまえです。ウォッカ飲んで、機嫌よくなって、わいわいがやがややってます。私も、風呂上りでやってます。

学生F：すごいいい風呂があって、みんなで入りました。

寺　田：ま、二時間ぐらい、風呂で、パーティみたい。

学生E：僕は、高校の時からロシアに関心はあった。公務員、特に警察官になろうとしていたから。ある日新聞で、“ロシア語が使える警察官”という記事をみたので、大学に入ったら、やっとかなきゃ、と始めたことからはまっちゃった。

寺　田：ここの卒業生で、警察の国際捜査研究所でロシア語をブラッシュアップしている学生もいますよ。

学生E：僕は、新入生ガイダンスで寺田先生が、日本では中国語を学ぶ人数が多いのに、ロシア語は大学生の0.5%しかやらない、というのを聞いて、それに魅力を感じました。日本の隣の国なのに、と思い。実際、希少価値人間になれる。

寺　田：変人になれる（笑）。

学生F：中国語は学ぶ人が多いし、英語はあまり好きじゃなくて、ドイツ語は固そうだったので、ロシア語を選びました。まず、人数が少ないのは魅力で、先生もいいし、時々話すことが他の先生と違って面白い。ロシア語の授業を受けて、すごくいい勉強になったので、ほんとに選んでよかったな、と思ってます。

学生E：先生の雑談がおもしろい。内容は明かせないけど（笑）。僕は留学でロシアに行ってみて、「ここまで来たら極めよう」と！弁論大会にも優勝したので、気持ちがこもっています。卒業後ロシアに留学して、先生ぐらいまで極めたい。

学生D：ぼくは、公務員になって、ロシア語を生かしたり、関係を持てるような仕事を考えてます。

学生F：僕もE君のように向こうの大学を1年か2年経験したい。一番の目標には警察官を考えてるけど、とにかくロシアに関わっていこう、もっとロシア語を勉強しようと考えてます。

寺　田：学びながら卒業後の進路を見つけてきた、という感じですね。

（12月22日、ロシア語文化演習（1部）の授業中に取材させていただきました。）

貨幣金融論（1部）

小林　真之

（テーマ）金融システムとセーフティ・ネット

本講義では現代の金融行政・政策を評価する前提として通貨・金融に関する基礎的理解を深め（前期）、次にそれらをふまえて現代日本で進行している金融構造の変化、及び銀行破綻処理政策にみられる政府の金融行政の特徴について明らかにしたい（後期）。

郵政事業の民営化で私たちに何か利益があるんですか？

司　会：一年間の講義を通じて、みなさんがどんな興味関心を持たれたか、少し話し合ってみたいと思いますが、日本経済の現状と将来を語るとき、金融問題は大事な焦点ですね。

小　林：日本では今、大手企業に融資している大銀行が経営困難に陥っています。アメリカの場合ですと、相互貯蓄銀行のような小さな銀行は破綻していったんですけれども、大きな銀行は残ってます。日本の場合、大手の銀行が不良債権問題を抱えてしまい、その処理をどうするか、また、新しいしいビジネスモデルの中でどういう方向に進んでゆくべきか、なかなか見えてこないのが現状です。そこに大きな危機感があるわけです。

司　会：金融問題は複雑でなかなか分かりにくいところがあるんですが、この際先生に聞いてみたいことはないですか。

学生G：企業の銀行離れが進んでいると言われていますが、銀行はこれからどういう方向に進んでいくんでしょうか。

小　林：社債の発行などを通じて直接金融のできる大企業では銀行離れが進んでいますが、しかし中小企業は社債の発行もできないので、そういうところでは銀行に依存せざるをえないわけです。中小企業に関しては、銀行離れよりもむしろ銀行に依存する度合いが強まっているわけです。

学生H：中小企業への融資については、自己資本比率の問題が関わってくると聞いていますが。

小　林：自己資本比率の問題でいうと、中小企業向け融資はリスクウエイトが高いわけです。ですから、そこに融資するためには自己資本を積まなければならない。そこから中小企業がうまく資金を調達できないという問題が起きてくるわけですね。

学生I：講義では、郵政事業の民営化とか特殊法人改革などタイムリーな問題も扱って下さったので、たいへん興味を持ちました。

小　林：去年は、消費者金融と公的金融の話はしなかったんですが、今年は郵政三事業の民営化の現実的な動きが出てきたので、急遽その話を盛り込みました。いくつかの争点を説明したつもりですが、理解できましたか。

学生J：郵政事業の民営化で私たちに何か利益があるんですか。

小　林：そこが一番の問題です。顧客の立場に立って利益があるかどうか。今の政府の議論では、官業が民業を圧迫しているというところに焦点が当てられていて、利用者にとって利益があるかどうかということはあまり議論されていません。

学生K：郵便事業も民営化しようとしていますが、利益優先で過疎地が見捨てられてはだめだと思います。

小　林：郵便事業に参入できるのは、宅配の大手企業ですね。この問題を考えるとき、航空事業の規制緩和の例が参考になります。航空事業の規制緩和でエアドゥが誕生しましたが、路線を開設したのは千歳～東京という、一番乗降客が多いところでしょう。あれは多いから成り立つんですね。地方の路線だと絶対成り立たない。だから今までは、乗降客の多い路線で上がった収益で地方の路線を維持するという総合的な運営がなされていたんです。そういう意味で公共性の一端を担っていた。航空制度にはそういう公共性があるわけです。実は、金融にも似たところがあります。私が強調したいのは、金融インフラというのはたしかに営利企業によって担われているんだけれども、それだけですまない面があるということです。その点をどう見ていくかということが講義の大きなテーマなんです。単に経済の問題としてだけではなく、もう少し社会的な側面、つまり、市民としてどこに住んでいても最低限のサービスを受けることができるというシビルミニマムを実現するという課題があると思うんです。その中に金融サービスも含まれるわけです。郵便貯金の民営化問題が投げかけているのはそういう問題だと思います。こういう観点から公的金融や中小企業向け金融のあり方について考えてみたいわけです。

仕組みやそれが登場してきた背景は説明しますがその先のことは、みんなに考えてほしい自分の考えを持ってもらうのが講義のねらい

学生L：僕はペイオフの問題に興味を持ったんですが、もう少し詳しく聞きたかったです。

小　林：時間がなかったのであまり詳しく説明できませんでした。私は講義では自分自身の意見をあまり言わないようにしてます。それよりもみんなに考えて欲しいんです。例えばペイオフについても、その仕組みやそれが登場してきた背景は説明しますが、その先のことはみんなに考えてほしい。自分の考えを持ってもらうというのが講義のねらいなので、少し不満が残ったかもしれませんね。

学生M：自分の考えをバーッとしゃべる先生もいますけれど、小林先生は学生の意見をよく聞くので好きです。

小　林：好きですか…（笑）。

学生N：大学では、教室が大きく人数も多いので、先生と学生がなかなか接することができないのが残念です。

司　会：小林先生は近寄りがたい感じがしますか。（笑）。

学生N：そんなことは全然ないですけど…（笑）。

小　林：アメリカンスタンダードとかペイオフとか日銀の金融政策とか、いろいろと意見の分かれる問題があるわけですが、本当は私は、マイクを持ってみんなのところに行って、そういう問題をどう考えているか、意見を聞きたいんです。こうやって少ない人数で議論できれば一番いいんですがね。時々小テストもやりますが、僕が本当に見たいのは、結論よりもむしろその結論にいたる理由づけのほうなんです。みんなが情報を得るのはテレビからだと思います。テレビの影響はものすごく大きいですよね。でも、テレビに出るコメンテーターには市場原理主義者が結構多いので、私の言うこととみんながマスコミから得ている情報とではだいぶギャップがあると思うんですがどうですか。

学生G：見てません（笑）。

小　林：そうですか。私のゼミ生は結構見てるんですけれども、講義で取り上げたカレントな話題がそこに出てきたとき、いろんな論者の考えについて、それは間違っているとか、ちょっと変だぞ、といった気持ちでそれに食い下がってみるという姿勢がみんなの中に育ってほしいと思ってます。

（12月19日、貨幣金融論（１部）の授業終了後に取材させていただきました。）

学生時代

僕の学生時代は第一次安保の頃で、学校ではストライキばかりやっていました。ストライキがあるがゆえ自分で勉強をしなくてはならない。だから、学校の講義と関係のないことを、いろいろ勉強できたのかもしれません。卒業は北海道大学農学部でした。北海道で一番古い大学だから、きっと面白いだろうと（笑）。こうして、理科系の農学部へ行ったのです。文科系・理科系どちらを学ぶか、ずいぶん迷いました。先に述べたように安保の時代でしたから、社会科学的な関心が理科系の学生にもあったわけです。もっと社会が平和だったら、工学部へ行って先端技術をやろうという風なことになったかとも思うのですけれども。そうすると、農学部というのは中途半端なところがあって、今考えると、それが一つの良さだったのかも知れないですね。また、経済学だけをやりたいのなら経済学部へ行けばいいのですけれども、理科系に足を置いておきながら、少し文科系もやりたいと思って農業経済に進みました。

大学院へ進学

僕が学校へ残った理由は、もっと経済を勉強したい、学校で教えてくれることだけでは分からないことが多いから、もう少し勉強してみようか、と。特に社会科学をやろうと、大学院に進みました。就職するのも面白くなさそうだし（笑）。そういった時期に、ものすごく映画の好きな親友がいまして、「映画監督になろうか」と言いだしたことがありました。場末の安い映画館というのがあって、親友と二人で映画ばかり観ているうちに、真剣にそんなことを考えたようです。結局、友達は農業関係に就職したのですけれども。

私の入った大学院は、農業市場論講座が全国で初めてできたところで、それも入学のきっかけだったかもしれない。「そんなに珍しいのなら入ってみようか！？」ということで。当時、日本農業は機械化の頃でした。私は機械にも興味があったものですから、農業の機械化が進むのか進まないのか、機械化が進んだ時にどういう問題が起きるのか、という研究をしました。機械の生産ではなく、買って使うほうです。肥料ですと売れば、買えば、使えば良いだけでしょうが、今までにない機械を農家が使う時には「ただ買えばいい」ではない。メンテナンスなどがあり、今までの流通過程とは違う。「農業機械の流通過程」が、マスターの時の研究テーマとなりました。

ドクターの時は、指導の先生に勧められ「農産物の先物価格」ということを研究テーマにしました。本学に赴任してからも、その流れで商品取引所の研究を続けていたのですけれども、当時、大阪に福田敬太郎さんという方がいまして、氏の研究会に、ふた月に一度くらいずつ通い、２年ぐらい参加していました。その頃の一番の思い出は、研究会が終わったら「吉兆」へ行って、ご馳走をして頂いたこと。当時の自分では行けないような所でした（笑）。その時、北海道からみて「日本(大阪)って、ずいぶん違うところだなあ」という印象を持ちました。

これからの研究

今は「東アジアの商品経済」ということを研究テーマにしています。最近、中国が市場経済を採り入れたことによって、東アジア全体が新たな市場経済の段階に入るでしょう。

それと趣味も含めて、今、凝っているのは歴史。還暦を過ぎたら少し歴史を研究して、退職をしてから色々な遺跡を訪ねられたら良いな、と思っています。歴史に興味を持った理由は、商業や市場を研究すると、日本の市場の始まりについて一度はやらなければならないのに、市場、“市”の始まりということについて、全然定説がないのです。『日本書記』に何とか天皇のときに大和、奈良県に市が立つ、と書かれているのに、『魏志倭人伝』には“国国二市ガアリ”とも書いてあるんです。年代も違えば、場所もはっきりしていない。何時、何処に“市”があったのか、そこから古代史への興味を持ちました。

もう一つ、大事なきっかけとして１９９３年にカナダのレスブリッジ大学に交換教員でいった際のこと。ここでは、日本や日本の歴史についても話しをすることになりました。経済・経営のことはもちろんですが、その半分は日本の成り立ちとか文化についてでした。その講義の資料を作るために英語で話すのだから英語の文献を、と日本史文献を探したのですが、意外にないことに驚きまして。経済の領域だったら、だいたい英語、西洋史だって英語でしょう？　それで日本史の研究の世界は、変わっているのだなと思ったのです。これで、より日本史研究への気持ちが高まったんです。最近、法隆寺の年輪が分かったでしょう？　今まで疑問に思っていたことが、いくつか解けてきているわけです。それを今、一生懸命、学園の論集に書いてます。

【私の履歴書】

川　端　俊　一　郎　教授

担当講義 ● 商学総論

PROFILE

1962年　北海道大学農学部農業経済学科卒業
1964年　北海道大学大学院農学研究科農業経済専攻
1967年　北海道大学大学院農学研究科農業経済専攻博士課程単位取得
1967年　北海学園大学経済学部専任講師
1969年　北海学園大学経済学部助教授
1978年　北海学園大学経済学部教授～現在に至る

主な論文

「この国のかたちと常識・七世紀の政権交代～東アジアのなかの日本～」『学園論集』第101号（北海学園大学学術研究会・1999年9月）、「これからの農協産直を考える」『研究月報』第563号（協同組合経営研究所・2000年8月）、「神の国の歴史～古代の政権交代と国体の維持～」『学園論集』第107号（北海学園大学学術研究会・2001年3月）、「法隆寺のものさし～南朝尺の材と分による営造そして移築～」『学園論集』第108号（北海学園大学学術研究会・2001年6月）、「産直という名の流通システム」『経済論集』第49巻第2号（北海学園大学経済学会・2001年9月）

現在の研究テーマ

東アジアの商品経済

SYUNITIRO　KAWABATA

［学生諸君へ］

経営学科開設当時の学生は、自営業のお子さんがかなりいて「将来、会社を興すんだ」「後を継ぐから、経営の勉強をしたい」「小さな親父の会社を、もっと大きくしたい」という学生が、何人もいたのです。就職も「どこか鍛えてくれる、勉強をさせてくれるところはないですか？」というぐらいに。やはり全然、環境が違ったかな。今はもう、全然、そう学生がいないでしょう？それに、昔の学生にはマネジメント能力があったし、やり手だったと思う。今の学生は、何かこちらからモチベーションを与えないと、なかなかできない部分がありますね。昔の学生は、なにせかにせ要求した。正気の沙汰とは思えない騒ぎも起こしたけれども、勉強もしていたかな。そんな部分を君たちにも持って欲しいと思います。

学生時代

中学時代は聴く一方だったのですが、高校生の頃からロックを演奏する方にのめりこみまして、文化祭に出演したりしていました。大学時代も勉強そっちのけでバンド活動にいそしんでいました。当時パンクロックが流行ってまして、コードを３つ押さえられれば演奏できると知って、勇気付けられました。それと、もはや「反抗」を通り越して「絶望」をテーマとするにいたったパンクが、当時の自分の精神状況とマッチしたんでしょうね。

研究者の道へ

教員だった父の影響を受けて、英語教員を目指していましたが、採用試験で不合格となってしまいまして。その時に父親から、かつて父自身ができなかったイギリス留学を勧められ、私費留学しました。そこでは、さまざまな国籍の人たちと出会い、日本ではできない貴重な経験をしました。そうして、イギリスには1年半、その後フランスに移って1年間滞在しました。人間はどこの国の人でも、根っこの部分は一緒だな、と感じましたね。

日本に戻ってから大学院に進みました。学部はフランス文学専攻で、特に世紀末文学に関心があったのですが、源をたどっていくと、フランスよりもむしろイギリスに起源があることがわかりました。世紀末というと唯美主義ですが、その親玉的存在であるウォルター・ペイターという作家の本を読み始めたのはよかったのですが、書かれている内容はちんぷんかんぷんだったんです。だからこそ、かえってペイターへの関心は高まり、本格的に研究しようと英文学専攻を選びました。大学院時代は、非常勤講師として中学、高校、大学で教壇に立ち、予備校の講師もしました。バンドも時々やって（笑）。大変だったけど、楽しかったのも事実ですね。

生きる指針を与えてくれた一冊

小学生の頃から本好きだったこともあって、文学部進学は自然の成り行きでした。でも、外国の小説を読む際のポイントはなかなか掴めなかったですね。その頃、福田恒存の『人間・この劇的なるもの』という本に出会いました。小説は人間を描くものですが、この本には「人間とは何か」という本質的な問題が、平明かつリアルに提示されていました。その時、この本が自分の血となり肉となる感覚を味わったのです。そして、改めて外国文学を読むと、作者の言わんとしていることが、以前よりずっと明確にこちらに伝わってくるような感じがしたのです。ですから、この本との出会いは自分にとって大きな出来事だと思います。

英語の学び方

自分としては英語を教えているという感じはなく、むしろ「英語ができること」と「英文が読めること」とは全然別のことなんだ、ということを教えたいと思っているんです。「講読」の最初の授業で私は、英語自体は目的ではなく道具なんだ、と言うんです。でも、とりあえずはある程度の語彙力や文法力を身につけてもらわないと話になりませんからねえ。現実には、授業でやっていることは陰陰滅滅としてますよ。楽しく勉強するなんて、幻想です。いままでずっと勉強してきてますけど、楽しいと思ったことなんて一度もないですし。勉強って苦行でしょ。修行といってもいい。実はそれが楽しいのですけどね。とにかく、英文理解とは、その英文の背景がわかってないとだめ。単語も文法もわかるけど、何が書いてあるのかわからないことってよくあるじゃないですか。それは、つまり背景を含めて読み解くだけの知識が不足しているからですよね。理解は、幅広い知識の集積のうえにようやく成り立つものです。だから、教養が必要なんですよ。「講読」で使うテキストは結構難しいのですが、それはいくら英語ができても、英文が読めることとイコールではない、ということを実感して欲しいからなんです。そして真の意味での教養を身につけて欲しいと思ってます。そこまでいかなくても、教養の大切さに気付いてもらえれば、自分としては満足なんです。そこに思いが至らない学生がほとんどですからね。

【私の履歴書】

上　村　仁　司　教　授

担当講義 ● 英語講読

PROFILE

1961年　神奈川県相模原市に生まれる
1984年　早稲田大学第一文学部フランス文学専攻卒業
1990年　早稲田大学大学院文学研究科英文学専攻修士課程修了
1994年　早稲田大学大学院文学研究科英文学専攻博士（後期）課程退学
1999年　北海学園大学経済学部助教授
2001年　北海学園大学経済学部教授
～現在に至る

主な論文

『ウォルター・ペイターにおけるロマン主義精神の受容と変容』『異文化への道標』（大空社・1998年）、「ウォルター・ペイターの懐疑的精神について」『立正大学文学部論叢』第105号（1999年）、「ポール・ド・マン「ロマン的イメージの意図的構造」における実在主義の受容について―フランク・レントリッキアのド・マン解釈をめぐって―」『立正大学人文科学研究所年報』別冊第13号（2000年）、「ウォルター・ペイターの審美主義―「ジョルジョーネ派」とシラーの『人間の美的教育について』の関係」『学園論集』第105号（北海学園大学学術研究会・2000年）、「ウォルター・ペイターの『ルネサンス』―過渡期としてのルネサンスとその精神的状況」『経済論集』第145号（北海学園大学経済学会・2001年）

現在の研究テーマ

ウォルター・ペイターを中心とした19世紀イギリス文学思想史

HITOSHI UEMURA

［学生諸君へ］

自分が学生の時には、好きなことしかせず、勉強以外のことに熱中してきた方なので、えらそうなことは言えませんが、とにかく何でもいいからしてみて下さい。やってみなければわからないことってたくさんあると思うんです。とにかく経験を積み重ねること。よく「大学の4年間でやりたいことを見つけなさい」と言われますが、そう簡単に「やりたいこと」なんて見つかるはずがない。スポーツでも勉強でもクラブ活動でもいい。それが「大学時代に見つけるべきこと」ではない場合がほとんどでしょう。だけど、それでいいと思うんです。何かをすれば「経験」という宝物が手に入る。それをたくさん集めて下さい。人が行動する際にその人が「していること」自体にたいした価値はないと思うんです。大事なのは「何をするか」ではなく、それにどう取り組んでいるか、ということ。いわば「姿勢」ですね。この「姿勢」の質は、経験の積み重ねから各人がどれだけのものを掴むかによって決定します。私は学生の皆さんに最終的にクオリティの高い「姿勢」を獲得して欲しいんです。でも、これは一朝一夕にはできない。だから、学生時代にその礎を築いて欲しい。自分もいまだにこの礎作りに四苦八苦してるんですけど。

どうすれば授業がおもしろくなる？

―経済学部自己点検報告『教育と研究Ⅱ』「授業に関するアンケート集計結果」(2001年)より(3)

**自己点検報告での学生アンケートに対する教務関係の先生方の誌上対談です。
最終回のテーマは、授業内容についての問題です。
大学教育の根幹に関わるテーマだと思います。**

何をしゃべっているのか、わからない？

A委員／今回のテーマは、授業内容に対する不満についてです。まず、講義が聞き取りにくい、とか、板書がわかりにくい、という不満がかなりあります。これらは話し方とか、マイクの使い方とかを工夫し、黒板も見やすく書くなど直ちに改善できるものです。ロンドン大学・大学教授法研究部「大学教授法入門」(玉川大学出版部、1982年)という本には、発声矯正法まで解説してあります。この点、教員の努力が必要です。

B委員／何をしゃべっているのかわからん教員がいる、と学生が言っているのを時々聞きます。話し手、聞き手双方の問題と、教室などの環境の問題がある。また、私語については、その学生を注意しない教員に対する不満もよく聞きます。

A委員／学生のマナーの問題だが、この騒音である私語をなくすには、教員の責任も大きい。学生同士で注意することはほとんど期待できない。

　でも、聞かせる話をするのも大事で、関連のトピックを準備するとか、話の間を置くとか、最初にテーマを整理して示すとか最後に講義の要点・まとめをするなど、話の組立にもっと事前の準備が必要なのかもしれません。実際、自分の話をテープにとって聞き直すと、自分でもわからん、なんてこともあります。これは、大学に限ったことではないし、いわゆる世代間や若者のコミュニケーション能力のことも含め、とにかく問題の自覚が必要ですね。

現実を理解するのに役に立たない、ってどういうこと？

C委員／三番目に多い、現実の理解に役に立たない、とはどういう意味だろう。卒業後役立つとか、また、すぐ役立つことを求める気持ちはわかるけど。

　例えば、中学生が、なぜ数学をやらなきゃいけないの？ と親や先生に聞いたとき、親はどう答えるか？一つは、いずれ大人になればどっかで役に立つ、と答える。それとも、数学っていうのは、目先の問題を解けるかどうかだけじゃなく論理的思考が身につくんだ、と説得し、直ちに役に立つのではないんだ、とも答える。でも、いずれも子供はなかなか納得しない。そもそも動機づけの問題だから、答えを求めているわけではないんだけど。

D委員／でも、講義で学ぶことの意義、つまりどう役に立つとか、何がわかるようになるのか、授業の意味や意義は、しっかり示す必要がある。特に、科目の中には、ある程度体系もできており、これまでの研究の蓄積もあるのだから、そうした知識の体系、地図のようなものは示さないと、自分が何に向うのか、わからない。

C委員／学生のようにまだ知識が少ないところでの動機づけは、実用志向、報酬志向になりがち。「これで人の心がわかる」とか「株で儲ける」とか。でも学問自体の面白さを伝えるためは、もっと知識を蓄えさせるとか、資料検索の方法を教えるとかを積み上げさせ、充実志向、つまり「学問それ自体の面白さ」を粘り強く気づかせる必要がある。

A委員／こちらも専門のテーマを面白い、と思っていないと。だから教育と研究は表裏の関係にある、というのもうなずけます。

B委員／逆に「私の授業役に立ちます」というのは、うそ臭いところもありますな。

C委員／だから、現実の理解につなげるためにも、「ここが面白いんだ」とか「努力してみろ」というアドバイスの方が、まだ教育的効果は大きい。

A委員／そもそも、わかっている人は、わからない人の気持ちがわからないことがある。その上に、学生の「学ぼう」という気持ちを引き出すんじゃなく、それを受け止めないと結構悲劇的やね。ある先生は、人を見て法を説け、と言っていた。

どうすれば、理解につながるか？

D委員／やはり、まずむずかしいことをやる前に、基礎的なことをきっちり教えるべきだと思う。特に、一つの講義の中でも、年間を通して次第に理解していけるような工夫や努力がほしいし、カリキュラム全体もステップが踏めるような体系として、もっとわかりやすくする必要がある。１年生を担当しているある先生は、１年生の時に学ぶべき事をやって、２年生になってもはずかしくない学生を送り出したい、って言っていた。そういう教員間の連携プレーも必要だね。

A委員／逆に、なかなか講義が頭の中に落ちず、結局、消化不良を起こして卒業のためだけの単位を求めたり、意欲もわかないまま学生生活を終えてしまい、役に立ったのは卒業証書だけ、となってしまう。せっかく頭脳が柔らかい青年期を無駄にしてしまう。もちろん大学は講義がすべてじゃないけど。

B委員／どういうふうにわからん、と言ってるのかな？ 教科書読んでもわからんのか、そもそもわかろうとしていないのか？ くらいついていく努力も必要やないか。

授業は、学生と教師の「共同の営み」？

C委員／テーマに面白味を持たせるのは、なかなか難しい。個別の事例をただ積み重ねるだけでは、後に残らないし、やっている方も面白くない。直結したテーマだけでやるのは、どれだけ役立っているのかもわからない。逆に、次々論文を読ませて、理解の過程を学習させると、一生懸命打ち込む学生がでてくるが、直接的な答えを切望する学生もでる。学生も多様で、何を求めているかは学生の間でも分かれている。

B委員／「役に立つ」という域までその科目を専門的に深めようという学生には、大学の授業だけでは当然足りないし、もっと自分から一生懸命インプットせなあかん。

C委員／浅い知識にもとづいた、科学的な根拠の薄い、いわゆる「しろうと理論」の特徴は、大体「要因は一つである」として、いろいろ考察する過程を省略し、あらゆる現象を一刀両断に斬ってしまう。実際、僕も断定的な口調で講義をしたら、評判だけはすごくよかった。でも、理解を深めるため丹念に事例を積み上げていく講義をすると、なかなか結論がでてこないし、疑問もでるので、学生は満足しにくい。

A委員／講義の冒頭で、これにはいろんな考え方がある、と言ったら、戸惑いを感じる学生がいる。しかし現実は複雑だし、そう簡単にこうだ、と言えるもんでもない。逆に断定的な事を言う人に限って、一貫性がなかったりする。「世の中こんなもんや」じゃ研究にならんしね。

B委員／だから、そのうちわかってくる、というのも当たっているし、でも、わからんままの学生もいる。かといって、教員みんな手を抜いてやっているわけやないし、「一生懸命やって忘れられる」というのが教師の宿命とちゃうんかなー。

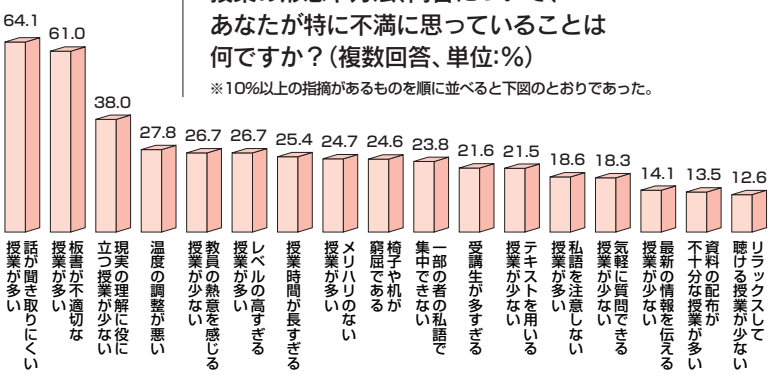
D委員／理解できないというのは、教員にも学生にも努力が不足している現れと考えられるし、かなりの学生は、自分の努力不足も自覚している。だから、やはり教員の側から「学習方法」とか「学ぶ意欲を引き出す方法」を工夫する必要がある。プリントを準備するとか、ビジュアルな材料も使って興味を惹かせると、まず熱意も伝わる。また、もっといろんなテキストを読ませるトレーニングも必要だ。

A委員／アメリカの大学のシラバスを見ると、大体講義までに読んでくるべき文献、そのページまで細かく指定してある。

D委員／学生と教員は、いわば同じ問題に向き合い、取り組んでいるのであって、教師は少し先んじているだけだと思う。講義は、学生と教師の共同作業みたいなもの、と言えるのかもしれない。こんな時代だからこそ、大学教育はあくまでも理想を求め、例えば、共通科目も含め、入学直後の１年生から「どう教育すべきか」を検討したり、教育内容に関しても日常的体系的に教員集団が議論していくことも必要だ。

Q 授業の形態や方法、内容について、あなたが特に不満に思っていることは何ですか？(複数回答、単位:%)

※10%以上の指摘があるものを順に並べると下図のとおりであった。



econ.（エコン）No.5　発行：北海学園大学経済学部　2002・春

〒062-8605 札幌市豊平区旭町4丁目1-40　TEL.011-841-1161　FAX.011-824-7729
HP.http://www.econ.hokkai-s-u.ac.jp　e-mail:admin-ec@econ.hokkai-s-u.ac.jp